
8月の秘密基地

Nana.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

8月の秘密基地

【Nコード】

N1580E

【作者名】

Nana.

【あらすじ】

主人公の紗江は、彼氏の淳平から来る毎日のメールに嫌気が差していた。ある日ふいに立ち寄った空き地で、ある少年と出会って…？

友達の夕実は、携帯を枕元に置いとかないと寝れないって言った。
お隣の小学五年生のツトム君は、最近首から携帯を下げている。
最近じゃ、お母さんまでデコメールとかやり出した。

着うた一曲、１００円。

月の携帯使用料金、１００００円超えナリ。

私達若者に、携帯っていう便利なモノが普及する事を、よく思っていないお偉いさん達がいるとか、いないとか。

「おい、紗江。何でお前、昨日メール返さなかったんだよ」

夏休みの補習授業。

だらだらと一時間半。

時計が昼の十二時を回り、やっと終わったと思ったら、淳平が口を尖らせて私に携帯の画面を突きつけた。

「嘘、送った？じゃあ、センターで止まってたんだ」

「マジで？」

私は軽く嘘について淳平に笑いかける。

角の削れた革靴に、使ってなくて新品同様の教科書をしまった。

私は、携帯に踊らされている。何か、阿保っぽい。

メールでなら、人の心の中に踏み込んでもいいのだろうか。

淳平なんかもう、サッカーやった後の泥だらけの靴で、私の中に入りこもうとする。

これは列記とした不法侵入。

毎日の低俗なメールのやり取りに、私の親指は億劫になっている。

ポケットで携帯が振動する度、何ともいえない気持ちになる。

でも友達に聞いたら、『それがフツウ』だと言う。

「紗江さあ、最近付き合い悪くない？」

私はぎくりとした。

「そんな事ないよ」

「何か……冷めてるし」

「それは元からの性格じゃない？」

「ふーん」

淳平は最近、スネ夫くんだ。

拗ねて口を尖らせるから、ますますそれらしい。

その原因は、私が淳平との“付き合う”っていう価値観の差に戸惑っていて、それがそれとなく態度に表れてしまっているせいだと思う。

本当に好きなら、毎日のしつこいくらいのメールも鬱陶しいだなんて思わないのだろうか。

心の中に踏み込まれても、嫌だなんて思わないのだろうか。

だけど私の場合、もし淳平じゃなくても、同じ様にモヤモヤしてい

たと思う。

淳平と付き合いだしたのは、昨年の五月の頭。
体育祭の練習の帰りに告白された。

だらだらと五月病にかかりかけ、どこか心寂しかった私は、浮かれて首を縦に振った。

淳平は賑やかで明るいから、クラスでもかなり目立つ存在で、男女ともに人気がある。

だから私は、何で淳平が私を選んだのか、今だに分からないでいる。

淳平は何気に束縛体質で、言動も考え方も、どこか子供っぽい。

子供っぽい…といえば、淳平に限らず皆そうだ。
高校生と言えど、皆まだまだ子供なのだ。

逆に大人になる事に逆らって子供帰りし、昔のアニメがクラスで流行ったりしているくらいなのだから。つまりまあ、自我に目覚めるのに忙しい、恋だ、青春だ、将来だって難しい、複雑なオトシゴロなのだ。

「暑い……」

ぶっ、ぶっ倒れそう。

もう七月も終わる。

太陽がじりじりと照らし、私の頭皮は火傷しそうなほど熱い。蝉は頼んでもいないのに大合唱を披露し、目の前にはゆらゆらと水が逃

げていく。

最近じゃテレビで温暖化、温暖化って騒がれているけど、こうやって実際に異常な暑さを嫌でも体験させられれば、長ったらしい文章で説明されなくても『何か、地球が危ない気がする』と本能で感じるというもの。

今日はサッカー部の練習があつてよかった。
今日は誰とも喋りたくない。

気がつかぬ間に、蚊に二の腕を刺されたらしい。
O型の血は美味しいというのは、本当なんだろうか。あんな小さな虫けらにも、味へのこだわりがあるなんて、何だか生意気だ。

二の腕を掻き篦りながら、私はめげずに歩き続け、木々が鬱蒼と茂って森のようになっていた所まで来た。すぐ傍に、未だに何をしているのか分からない、中くらいの大きさの工場があり、乾いた音を響かせている。煙突からは、明らかに街の空気を汚しているような灰色の煙が、もくもくと空へ伸びている。

工場の外には瓦礫の山。
タイヤや廃棄された車の部品などが散乱していて、ちょっと映画のセットみたいだ。

そして、そのすぐ隣に草ぼうぼうの空き地がある。
伸びきった雑草は多分、私の身長くらいあるかもしれない。針金で囲ってはあるものの、誰も手をつけていなそうな空き地だ。誰の所有地なのだろうか。

空き地を眺めていると、ふと胸に疼く物があった。

記憶の扉がノックされる。

私は思わず足を止めた。

「そうだ、何だっけ、名前」
思わず頭を抱え込む。

「…チビ？あ、チビだ！」
それをキツカケに、幼い頃の記憶がビュンビュンと音を立てるようにして蘇ってきた。

あれは、小学生の頃。

いつものように外で遊んでいた私は、ある一匹の子犬を見つけた。
泥で汚れていたけど、瞳は澄んで、綺麗な茶色の毛並みをしていた。
野良犬だった。

私はその犬に、チビという名前をつけた。

『お母さん、お家で犬を飼ってもいい？』そんな子供のけな気なお願いにも関わらず、親は揃って、首を横に振った。途方に暮れた私は、思いついた。

外にチビのお家を作ってあげよう！そして、毎日餌を持って来よう！

いかにも子供らしい発想。
しかし、あの頃の私には、最高のアイデアであったのだ。

その場所選ばれたのが、この空き地。
ちょうど真ん中に草が少ないスポットがあり、大きなケヤキの木が一本聳え立っていた。

その木の下に、ダンボールで作ったみすばらしい質素な小屋。
しかし、運よく雨が降っても、風が吹いても、小屋は壊れなかった
ので、私は夏休み、毎日のように通いつめた。

いつしかそこが、私の秘密基地となっていた。

その言葉の響きに、幼い私は一丁前に酔いしれていたのだ。

いけない事をしていたわけじゃないのに、どこかハラハラするような、不思議な感覚。そこには誰にも踏み込めない、私だけの世界が存在していた。

あの頃の私は、宿題よりも、習い事よりも、友達と遊ぶよりも、チビと遊ぶ時間の方が楽しかった。大切だった。

チビには、少ないお小遣いでドッグフードやミルクを買ってあげた。
チビが小屋の中におとなしく居た時もあれば、いない時もあった。
三日現れずに、諦めてかけていると、ふらっとまた姿を現したりした。

ついに、七月の終わり頃、チビは本当にいなくなってしまった。一週間待っても、二週間待っても、チビの鳴き声は聞こえない。それでも私はめげずに通い続けた。

このままじゃ、一生会えない。二度と会えない。
私は毎日寂しくて押しつぶされそうだった。

もう一度会いたい。

もう一度、頭を撫でてあげたい。声が聞きたい。

まだ別れの辛さを味わった事のない子供には、とても酷な時間だった。

しかし期待も虚しく、とうとうチビが戻ってくる事はなかった。私がいっからその場所へ行かなくなったのかは、あんまりよく覚えてない。

「わぁ…懐かしい」

私はそんな事を思い出して、胸が絞られるような切ない気持ちと、あの頃と同じような好奇心で、ふらふらと空き地に足を踏み入れた。

「ほっ」

ミニスカートで針金をまたぐ。

はしたないが、どうせ誰も見てはおらん。

草を掻き分けるのはなかなか大変だった。ちくちく足に当たり、かゆくてたまらない。しかも、小さな虫達がぴょんぴょんと鬱陶しく目の前を飛び回っている。

くっそー。

私は時々奇声を発しながらも、何とかして中心のスポットに向かっ
てずんずん進んでいった。

ついに中心に到着。

何か達成感。

ただいま。そんな言葉を言いたくなった。

草の匂い、ヒメジオンの花が雑草に紛れて、沢山咲き乱れていた。

ヒメジオン。別名、貧乏草。

誰が言い出したのか、ヘンテコなあだ名をつけられて、何とも気の毒な花だ。

最後の長い草を掻き分けると、何か茶色いものが見えた。

茶色の毛。

茶色？気がつくと言を発していた。

「チビ！」

私はまさかと思いながら、慌てて中に足を踏み入れた。するとそこに居たのは、チビ……

ではなく、茶色い髪の少年だった。地べたに寝そべり目を閉じている。

何だ、と思ったのと同時に、何でここに人がいるんだろうと思った。私がしばらく状況を読めずに、少年に目を取られていると、彼の目がパツと開き、首だけが私の方を向いた。思わずたじろいだ。彼は棘棘と言った。

「人の秘密基地に勝手に入ってこないでくれる？」

「え？」

秘密基地……人の秘密基地？

その言葉を聞いて私は思わず言い返していた。

「ここは私の秘密基地だよ」と。

案の定、少年は不思議そうな顔をして、体を起こした。体の足元からぐんぐん後悔が湧き上がって来る。何を言ったんだろう私は。混乱と恥ずかしさで、ひたすら焦った。

「あ、えつと」

ここはただの思い出の切り抜き。

あの頃と変わらない匂いがする場所。

別に誰のものとかが、そういうんじゃないのに。すると彼は急に笑い出した。

「驚いた。先客がいたなんて、思いもしなかった」

それは私の台詞だ。

「しかも、“チビ”って何？僕がチビだから、何かの当て付けかと思っただけ」

愛らしく笑う彼の全身を、落ち着いて見渡す私。

確かにこの子は割りと小柄だ。きつと、私より少し大きいくらい。165センチくらいかな。

端正な顔立ち。童顔だからか、幼く見える。一体歳はいくつだろうか？

「チビは、人間じゃないよ」

私はそれだけ言って、じりつと足を動かした。
彼は「ふーん」と頷き、あぐらをかいた。

「じゃあ、何だろうな。宇宙人？」

「は？」

「何かここ、UFOとか降りてきそうじゃない？ここの雑草も上から見たら、ミステリーサークルみたいに見えたりして」

「何それ」

私は思わず笑った。

これが奏太との出逢いだった。

毎日補習が終わると、秘密基地へ顔を出す。するとそこにはいつも奏太がいる。そして、他愛もない話をしたり、昼寝をしたり。

私はどんどん奏太に惹かれていった。

恋とも友情とも違う、不思議な気持ち。

「ねえ、奏太、メールアドレス教えてよ」

いつものように秘密基地で寝そべる奏太に、私は携帯を突きつけて言った。

私は奏太の名前しか知らない。苗字も、住所も、年齢も。
繋がりを求めて、私は嫌いなはずの携帯電話にすがってしまってい

る。

奏太はあっけらかんと返した。

「僕、携帯、持ってないんだ」

「え？」

私は間の抜けた声を出した。

携帯を持っていることを前提で話していた私は、完全に的是がはずれて、こそこそと携帯を持つ手をおろした。

「不便じゃない？携帯ないと」

「そんな事ないよ」

奏太があくびをする。

私は「ふうん」と小さく頷いて、手元の携帯に目をやった。

「じゃあ逆に聞いていい？不便じゃない？携帯があると」

奏太はそう言つてふつと笑った。

私は後ろ頭を突かれたような心持がした。

手元の携帯電話が、ずんと重くなった。

しばらく黙り込んだ。

その間にも、私の携帯は緑色のイルミネーションを発し、ぶるぶると振動を続ける。

気持ち悪いと思った。

携帯がものすごく醜い物のような気がして、思わず手を放した。

「ねえ紗江。エスパーとか信じる？」

「え？」

「テレパシーってさあ、人間の思い込みで成立すると思うんだよね」

「何？急に」

「例えば、僕が心の中で紗江に、秘密基地で会おうって呟くとする。それで僕が秘密基地に行つて、そこに紗江がいたら、それはもう気持ちを通じた、テレパシーが通じたって事になるんじゃないかって事」

「以心伝心みたいなの？」

「そう。だから、人間は思い込みでいくらでも人と繋がること出来るんだよ」

奏太の澄んだ瞳に、私の戸惑い顔が映る。

「だから携帯なんかなくても、僕らは繋がっていられる」

その言葉が、柔らかな風となつて、私の心を包み込んだ。微笑んだ奏太につられて、私も口を緩ませた。

奏太の髪が揺れる。

心のずつと奥で、チビが鳴いたような気がした。

「はい、じゃあ今日はここまで。次回は三十二ページの、関係副詞から入ります」

やっと補習が終わり、私は早々と教科書をしまい込み、立ち上がった。

早く奏太に会いたい。話がしたい。

奏太の事を考えていると、心が穏やかになる。穏やかな海。

だけどそこへ、ご機嫌斜めの荒波が、私の行く手を阻んだ。

「淳平」

「紗江、ちょっと」

淳平、怒ってる。

私は乱暴に手を引かれ、隣の視聴覚室に連れて行かれた。

「痛いってば」

「お前、最近毎日どこ行ってるの？」

淳平の厳しい目に、背筋がひやりと冷たくなった。

薄暗い教室の中で、私は平静を装う。

「別に、どこにも行っていない」

「嘘つけ。俺見たんだよ。お前、誰かと会ってるだろ？」

「……後つけたの？」

「ああ、悪いかよ」

「……最低！」

淳平はたじろぐ所かさらに勢いづいて、私に突っかかる。

「最低はどっちだよ！」

思わずぎゅつと目をつぶる私を見て、頭を投げやりに掻き、淳平は小さく続けた。

「隠れてコソコソ男と会うなんて、ありえねえ」

「奏太はそんなんじゃないんだよ！」

淳平は怒りと哀しみが混じったみたいな目を私に向けた。

「奏太？」

「淳平、分かって。淳平と奏太は違うんだよ」

「分かんねえよ。変だとは思ってたよ。俺が話してても、笑って聞けるだけだし。薄っぺらっつーか…いつも演技してるっつーか…メールも返さねえし。俺らちゃんと付き合ってるのになって」

血の気が引く。

「淳平の言う、付き合っつて………何？」

淳平のひるんだ顔。

奏太と淳平は違う。

淳平の事好きだけど、だけど。

あの秘密基地にだけは、踏み込んで欲しくなかった。
私と奏太…そしてチビとの特別な場所だから。

涙が溢れ出た。

「メールで好きって言い合ってたなら、それで繋がった事になるの？」

淳平の哀しそうな目が、私を貫いた。私は、その場を逃げ出した。

本当は分かる。

淳平の気持ちは痛いほど分かる。

誰だって一人が怖くて、一人ぼっちになるのが怖くて、誰かと深く繋がりうとする。絶対に裏切らない無償の愛が欲しいんだ。

私だってそうだ。

あの時、奏太に突きつけた携帯。それがすべてだ。

自分の弱さに嫌気が差す。淳平の不器用さに嫌気が差す。

私は走った。あの場所へ。ヒメジオンが揺れる、あの秘密基地へ。

空き地に到着して、私は目を疑った。

ここにパチンコ屋が立つという知らせの看板が、空き地の前に立てられていたのだ。

「…そんな」

私は怖くなって慌てて中に入った。けやきの木を目指して進む。

パチンコ屋なんていくらでも他に建てればいい。どうしてここなのだろう。

私の居場所を奪わないで。大切な時間を切り取らないで。

「奏太！」

いつもの場所へ着くと、奏太はけやきを見上げていた。

奏太は振り返らずに話し出す。

「このけやき、僕たちが生まれるずっと前から、この町を見守ってるんだよね」

私は涙ながらにけやきを見上げる。放射状に広がる樹形。力強く根を張り、高い背で優しく町を見渡しているこの木。

「あの時、紗江が僕を見つけてくれた時、本当に嬉しかった」

奏太の華奢な背中を見つめながら、私は黙っていた。

「一人じゃないって思えた。雨の日も風の日も、ここにすれば君がいた。この場所を選んでくれて、ありがとう。僕の傍にいてくれて」

奏太は振り返り、私の元へ歩み寄った。茶色い髪が、ふわふわと揺れる。

そして、ふわりと両手で私の右手を握った。

奏太の澄んだ瞳に、泣き虫が映る。

「ずっと待たせていてごめんね。もう一度会えてよかった。君とたくさん話ができて、本当に嬉しかった」

「うん」

「紗江は、周りにいる大切な人たちとちゃんと向き合っただ。そして、もっともつと大事にしてあげて。紗江が、その人たちの居場所になってあげて」

「うん」

頷く事しか出来ない。

だけど、奏太のメッセージは確かに私の中に根を張った。

「この場所が例えなくなってしまうても、ずっと永遠に心の中にある続ける。だから忘れないで」

「うん」

私達は小さく小指を絡ませた。

大きな機械音が響いた。草を刈っている音だろう。

手を離して、目を閉じた。

心のシャッターをしっかりと押した。

忘れないように、失くさないように。

チビの鳴き声がしたと思ったら、奏太の姿はもうなかった。

夏が終わろうとしていた。

「淳平、試合どうだった？」

「2 1で勝った！」

夏休みも終わり、新学期が始まった。

私はまだ淳平と付き合っている。

あの視聴覚室でのやりとりから、淳平は変わった。

私の手を優しく引いて、川の堤防まで連れてきたと思ったら、携帯を思い切り川に投げ捨てたのだ。「ナイッシュー！」なんておどけていた淳平に、私は驚きを隠せなかった。

淳平はしっかりとした口調でこう言った。

「これからは本音で付き合っていく」と。

私は頷いた。

誰よりも不器用なこの人に着いていこうと決めた。

結局また新しい携帯を買った淳平だけど、今までとは違った意味で、私を大事にしてくれる。

あの日から、私はあの空き地に行っていない。

今頃、パチンコ屋が出来て、ガチャガチャと賑わっているのだろう。あのけやきの木は、きつともうない。

だけど目を閉じれば、いつだって、あの日の永遠に帰れる。

夏の終わり。

ヒメジオンが揺れる、八月の秘密基地に。

（後書き）

最後まで読んでくださった方、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1580e/>

8月の秘密基地

2011年1月18日03時31分発行